



新潟大学五十嵐キャンパスのイルミネーション
ダブルホームの活動の一環で期間限定で開催されています



松 涛

№.43

2026. 3. 10

主な記事

同窓会長挨拶	2
原田直樹先生を偲んで	3
常任幹事会報告	3
今年度の活動計画	4
嵐丘庭の草刈り	4
同窓会会計報告	5
農学部を去るにあたって	6
支部だより	7
国際交流	10
「食と健康」	11
ペンリレー	12
「河渡学舎」の思い出と新潟地震	13
農学部だより	16
農学部の動向	16
職場紹介	18

同窓会長挨拶

同窓会長 大嶋 良 夫
(昭58農工)



令和の時代も8年目になりました。同窓生の皆様はいかがお過ごしでしょうか。前号(42号)の松濤にて同窓会長として初めてのご挨拶をさせて頂いて以来、早いもので1年が過ぎようとしています。微力ではありますが、引き続き会長としての務めを果たして参りますので、今後ともよろしくお願いいたします。

さて、この1年の世に中の動きを振り返ってみますと、国内、国外とも様々なことがあり過ぎて枚挙に暇がありませんが、少なくとも「農」に関係する者としては、なんといっても令和のコメ騒動に始まった一連の出来事が最大の関心事だったのではないのでしょうか。新米を巡る集荷競争の激化は仮渡金の大幅な増加と、そのために下げたくても下げられない新米の小売価格の高止まり、更にそのことが消費者の

コメ離れに拍車を掛け、いずれ米価の大幅な下落につながるのではないかと懸念も出てきました。一部メディアはこのような状況を「コメクライシス」「新潟米はどこに向かうのか」と報道し、政府も一時は「需要に応じた増産」に舵を切ったものの、新内閣が発足してから「需要に応じた生産」に方針転換し、更にこれを法制化する方向で検討しています。この文章を書いているのは令和7年12月ですので、皆さんがこれをお読みになっている頃にはどのような状況になっているか想像はできませんが、本当のコメクライシスに陥っていないことを願うばかりです。私見ではありますが、やはり品質の良いコメを、低コストな栽培手法で、市場の需要に応じて生産し、安定的に流通させることで、農家の収入を確保し、消費者にも納得感のある価格で提供することが重要であると思います。難しいことではありますが、目の前の状況に踊らされず、生産者にも消費者にも理解される、しっかりと先を見据えた取組をすべての関係者に望みたいものです。

ところで、この「先を見据えた取組」というのは、同窓会活動にも当てはま

ることで、我々も会の安定的な継続のために、活動を次の担い手に引き継げるよう先を見据えて、会員や在校生への支援を着実にやっていくことが必要だと考えます。農学部同窓会は令和5年に創立70周年を迎えましたので、同窓会の大きな周年事業は一段落したところではあります。次の大きな事業は令和15年(7年後!)の「農学部同窓会創立80周年」になるでしょうか。どのような形で80周年を迎えるか現時点で決まったものはありませんが、遅くともその2年前から準備を始めるのであれば、5年後の令和13年には記念事業に向けたアクションが起こせるよう、同窓会の体制を整えておく必要があると思います。いわゆる同窓会活動というものに関心が集まりにくい社会環境が続いています。80周年に向けての気持ちは同窓生の皆さんと今から共有していきたいと思っています。

その同窓会活動の1年を振り返ってみますと、昨年5月31日にアートホテル新潟駅前にて令和7年度の常任幹事会を開催し、令和6年度の活動報告と令和7年度の活動計画についてご承認をいただきました。同7月5日にはアートホテル日暮里グラウンドにて開催された農学部同窓会首都圏支部の総会にお招きいただき、新会長として初めて出席をさせていただきました。同7月12日には新潟県農地部の同窓会組織である「竹友会」の皆さんのご協力を得て、農学部長西海先生以下、大学の皆さんと共に汗を流して嵐丘庭の美

化活動(草刈り)を行いました。同8月23日にはコロナ禍などで開催を見送っていた同窓会新潟県支部総会が5年ぶりに開催されました。大学のおひざ元である新潟県支部の活動再開は同窓会本体にとっても大きな励みです。新潟県支部の同窓会活動への積極的な協力を期待しています。同10月18日には「新潟大学全学同窓会設立20周年記念・新潟大学と全学同窓会との交流会」に参加をいたしました。ここで興味深く聴かせていただいたのは教育学部教授岡村浩先生の「新潟大学の顔 門標四字」と題する記念講演でした。これは、新潟大学の新しい正門にある「新潟大学」と書かれた校名板(写真)は誰がどのような経緯で書かれたものか、ということ教えて下さるご講演でした。ご講演の内容は紙面の都合上割愛しますが、この門標四字をお書きなされた方の人物像、書風、経緯などを初めてお聞きし、見慣れたはずの「新潟大学」の文字に愛着が湧き、誇らしいものにも思えてきます。貴重なお話を聴かせいただいた岡村先生に感謝いたします。

同11月23日にはホテルモントレニッポ松本において開催された農学部同窓会長野県支部の総会にお招きを頂き、長野県支部の皆さんとの一年ぶりの再会を楽しみました。すべての支部活動が同窓会活動の下支えとなります。引き続き支部への支援を行って参りますので、各支部の一層の活性化をお願いします。その他、学部内諸行事や学術・

文化活動への支援、図書の寄贈や就業力育成、卒業祝賀会への支援など、農学部や在学生への支援も引き続き学部と協力して実施しているところです。

このように、総じて同窓会活動がコロナ禍前の状況に戻りつつある中で、同窓会事務局のマンパワー不足により同窓会ホームページの更新が滞る等の状況が生じていることについて、昨年の常任幹事会で事務局員確保のため予算の収支を含め改善を図りたい旨で説明させていただきましたが、未だ状況が変わっていないことをお詫びいたします。引き続き改善に努めて参りますのでご理解いただきますようお願いいたします。

最後になりますが、新潟大学が開発した「新大コシヒカリ」が人気テレビ番組「満天・青空レストラン」で取り上げられ、生みの親である農学部特任教授三ツ井敏明先生も出演されていきました。多くの方がご覧になったと思います。また国が進める防災減災対策である流域治水プロジェクトにおいて、農学部教授吉川夏樹先生が取り組む田んぼダムやため池の流域治水ポテンシャル評価手法の研究も、全国から注目を集めているとお聞きしています。更には今年4月には新潟大学の大学院が再編され、新しく設置される「総合学術研究科（仮称）」に「日本酒学プログラム」が人文社会科学専攻と自然科学専攻の両方に開設されると伺っており、「日本酒学」を立ち上げた農学部は国内外からの注目が更に高まる

ことと思っています。このように母校が広く注目されることは同窓生にとつて何より喜ばしいことです。新潟大学農学部の益々のご発展と先生方の益々のご活躍をご祈念し、あいさつの「ペ」とさせていただきます。



新潟大学正門（2024.11.25 筆者撮影）

原田直樹先生を偲んで

農学部准教授 鈴木 木 一 輝

原田直樹先生が2025年5月26日にご逝去されました。60歳でした。

原田先生は、2007年4月に農学部へ准教授としてご着任後、2018年4月に教授にご昇進され、19年にわたり本学に奉職されました。その間、農学部の副学部長や、自然科学研究科の副研究科長などの要職を歴任されました。

国際交流にも熱心に取り組まれ、文科省「大学の世界展開力強化事業（トルコ）」やその後継事業「Global Age 2025」に尽力されました。国際共同研究の推進や留学生の受け入れにも積極的で、研究室には常に多様な背景をもつ学生や研究者が集い、国際的な学びの場が育まれていました。

原田先生のご専門は環境土壌学・土壌微生物学であり、土壌微生物の生態

とその利用に関する研究、微生物機能を活用した汚染土壌の修復に関する研究、さらには農耕地における放射性セシウムの動態解明など、土壌の機能解明とその持続的利用に向けた多岐にわたる研究を展開されてきました。特に2011年3月の福島第一原発事故以降は、故野中昌法先生とともに福島

の農業復興にも注力されました。土壌化学から分子生態学まで幅広い分野を横断し、研究室にとどまることなく実際の農地や現場に足を運び、そこで得られた成果を社会へと発信することまでを含めた研究の在り方を大切にされ、その意義と楽しさを学生に優しく伝えてこられました。

先生の生前のご指導に深く感謝するとともに、その温かい人柄を偲び、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

新潟大学農学部常任幹事会が開催されました

常任幹事会が、令和7年5月13日（火）アートホテル新潟駅前において、開催されました。

常任幹事会は大嶋良夫会長の議事進行により、物故者への黙とうから始まり、2024年度の各種報告が行われ、執行部提案の2025年度活動計画、事業予算の審議が行われ、承認されました。

引き続き、大竹憲邦幹事長から学部の動向などの説明がありました。総会終了後は、懇親会開催となり、和やかな歓談が行われました。

2025年度活動計画(案)

新型コロナウイルス感染症の収束により、本年度も卒業祝賀会や農学部「学術・文化活動への支援」、「高校訪問」等の各種事業の活発化が見込まれます。このため、学部内諸行事への支援や学術・文化活動への支援、農学部図書室への支援、農学部学生の就業力育成事業への支援等、例年どおりの事業を企画し、学部とも協力しつつ可能な活動から実施していきます。

1. 「松濤」43号の発行

会員同士の交流の場となるよう同窓生からの投稿を促すとともに、農学部の「今」を発信することで会員と学部をつなぐ会誌づくりを目指します。

2. 『嵐丘庭』の維持・管理をととした交流の促進

一昨年の農学部同窓会創立70周年の記念事業として再整備を行った「嵐丘庭」の草刈りを学部と共同で実施するとともに、草刈り後に情報交換会を開催することで、会員と学部との交流を促進します。

3. 学部内諸行事への支援・参加

引き続き「卒業祝賀会」への支援(卒業生出席無料)を行うことで、卒業生の同窓会への理解と協力を促します。また、新入生父母懇談会に参加し、同窓会への理解と協力を促します。

4. 学術・文化活動への支援

農学部フォーラム K A A Bフォーラム等の学術・文化活動を支援します。

5. 受験者増加への取組みに対する支援(農学部の魅力PR)

農学部の魅力をPRするための「高等学校への訪問」及び「高等学校教員の招聘(アドミッションフォーラム)事業」への支援を行います。

6. 農学部在学生のための農学部図書室への支援

在学生への具体的な支援の取組として、農学部図書室に学生が希望する図書を寄贈することにより、学生の学ぶ環境の整備を支援します。

7. 農学部学生の就業力育成に係る支援

農学部学生の就業力育成にあたり、卒業生による指導、助言のための講演、研修会などの支援を行います。

8. 支部活動への支援

支部活動への資金助成や支部行事への本部役員の出席等の支援を行います。

9. 全学同窓会活動の運営及び各種行事への参加協力

本年度の全学同窓会設立20周年を含め、全学同窓会の活動に参加協力します。

・大嶋会長・全学同窓会理事
・大竹幹事長、在校幹事・運営委員会委員

嵐丘庭の草刈りを 実施しました

今年度も嵐丘庭の草刈り作業等を実施することが出来ました。
大嶋良夫会長、西海理之学部長の号令の下、新潟県支部会のご協力をいただき7月12日(土)に行われました。

7月の穏やかな日差しの中、同窓会創立70周年記念事業により木道をチップに再整備を行った嵐丘庭を、約1時間程除草等を行いました。

今年は作業終了後、お菓子やジュース、ビールなど配布して、労をねぎらいました。



2024年度新潟大学農学部同窓会 事業費決算報告 (令和6年5月1日～令和7年4月30日)

1. 収入の部 (円)

科 目	予 算	決 算	増 減	備 考
基金収入からの繰入	3,700,000	3,700,000	0	
前年度繰越	2,195,706	2,195,706	0	
利子・雑収入	26	1,251	1225	利息 1251 円
合計	5,895,732	5,896,957	1225	

2. 支出の部 (円)

科 目	予 算	決 算	増 減	備 考
1. 事務局費	700,000	820,300	120,300	通信費、光熱水料、電話料、謝金、消耗品費等
2. 会議費	600,000	1,415,262	815,262	常任幹事会旅費、常任幹事会会場使用料等、総会案内発送
3. 名簿情報維持管理費	90,000	88,275	▲ 1,725	名簿データメンテナンス
4. 卒業祝賀会費	701,000	700,275	▲ 725	
5. 退職者記念品費	0	0	0	
6. 嵐丘庭維持費	50,000	5,085	▲ 44,915	中庭草刈り 1 回
7. 「松涛」発行費	2,000,000	1,854,847	▲ 145,153	「松涛 40 号」
8. 慶弔費	50,000	0	▲ 50,000	
9. 支部活動助成費	360,000	354,125	▲ 5,875	8 支部 (6 支部 35,550 円、新潟県支部 70,275 円、首都圏支部 70,550 円)、資料送付 1,430 円
10. 学文活動助成費	250,000	0	▲ 250,000	
11. 全学同窓会負担金費	440,000	432,575	▲ 7,425	
12. ホームページ費	10,000	2,000	▲ 8,000	ホームページ更新等
13. 志願者確保対策助成費 (高校訪問旅費助成費)	170,000	0	▲ 170,000	教員による高校訪問
14. 農学部図書室充実費	100,000	99,534	▲ 466	農学部学生による希望図書の購入補助
15. 学生の就業力育成に係る助成費	50,000	4,000	▲ 46,000	就職ガイダンス謝礼
16. 予備費	324,732	96,553	▲ 228,179	
合計	5,895,732	5,872,831	▲ 22,901	

3. 差引残高 (A) - (B) + 1225 (利子増加分) 24,126 円

2025年度新潟大学農学部同窓会 事業会計予算 (令和7年5月1日～令和8年4月30日)

1. 収入の部 (円)

科 目	本年度予算	前年度決算	増 減	備 考
基金収入からの繰入	4,400,000	3,700,000	700,000	
前年度繰越	24,126	2,195,706	▲ 2,171,580	総会開催のため
利子・雑収入	1,251	1,251	0	
合計	4,425,377	5,896,957	▲ 1,471,580	

2. 支出の部 (円)

科 目	本年度予算	前年度決算	増 減	備 考
1. 事務局費	750,000	820,300	▲ 70,300	全学同窓会交流会・役員会出席補助、通信費、電話料、各支部への出張旅費、謝金、消耗品費等
2. 会議費	200,000	1,415,262	▲ 1,215,262	常任幹事会開催関係経費等
3. 名簿情報維持管理費	90,000	88,275	1,725	名簿情報メンテナンス等経費
4. 卒業祝賀会費	701,000	700,275	725	卒業祝賀会費補助
5. 退職者記念品費	30,000	0	30,000	定年退職者 2 名
6. 嵐丘庭維持費	50,000	5,085	44,915	除草等
7. 「松涛」発行費	1,400,000	1,854,847	▲ 454,847	「松涛 43 号」「しおり」印刷、発送等
8. 慶弔費	50,000	0	50,000	弔電、生花代等
9. 支部活動助成費	360,000	354,125	5,875	支部活動助成 (6 支部 @ 35,000 首都圏、新潟県 @ 70,000) 振込手数料
10. 学文活動助成費	50,000	0	50,000	3 大学合同研修会、FC シンポ、新大 GP、農学部フォーラム等
11. 全学同窓会負担金費	440,000	432,575	7,425	令和 6 年度入学定員による比率 (%) 8.046 432,300 円
12. ホームページ費	5,000	2,000	3,000	HP メンテナンス等経費
13. 志願者確保対策助成費 (出前講義旅費助成費)	100,000	0	100,000	高校訪問、アドミッションフォーラム等
14. 農学部図書室充実助成費	100,000	99,534	466	農学部学生用図書及び閲覧スペースの充実
15. 学生の就業力育成に係る助成費	50,000	4,000	46,000	農学部学生の就業力育成のため農学部卒業生による指導・助言
16. 予備費	49,377	96,553	▲ 47,176	
合計	4,425,377	5,872,831	▲ 1,447,454	

2024年度新潟大学農学部同窓会 基金会計報告 (令和5年5月1日～令和6年4月30日)

1. 収入の部 (円)

科 目	前年度	今年度	増 減
繰越金	27,437,804	24,629,338	▲ 2,808,466
基金収入 (入会金)	3,993,767	4,592,767	599,000
利子	407	407	0
合 計	31,431,978	29,222,512	▲ 2,209,466

2. 支出の部 (円)

科 目	金 額	備 考
事業費繰入	3,700,550	3,700,000 + 手数料 550
合 計	3,700,550	

3. 次年度への繰越金 (円)

科 目	金 額
収入合計	29,222,512
支出合計	3,700,550
繰 越 金	25,521,962



農学部を去るにあたって

臨別殷勤重寄詞

木 南 莉 莉

(生物資源科学プログラム)



2002年3月1日に農学部農業経済学分野の助教授として赴任し、24年間1ヶ月の歳月が経ちました。在職中は多くの方々からご支援とご協力をいただいたおかげで、教育と研究に専念することができたと同時に、幾つもの「ガラスの天井」を突き破ることもできました。それらの出来事や過ごした日々を振り返ってみると、無事に定年退職を迎えられたことに静かな喜びを感じます。

上海生まれ、上海育ちの正真正銘の上海人でしたが、これまでの人生の大半を日本で過ごし、その中でも新潟で過ごした時間が最も長いです。そのためか、新潟出身の学生に「先生は新潟人ですね」と言われたことがあり、驚きと同時に嬉しさを感じました。留

学生を含む多様な文化的背景を有する学生と一緒に学び、研究した時間は私の人生において何物にも変え難い貴重な経験となり、これからの人生にも影響を与え続けると信じます。
Professors never die; they just lose their students and faculties.

不確実性の高い現代において、卒業・修了した学生たちはグローバル／ローカル社会で活躍し続けるために、大学で学んだ知識もさることながら、そこで芽生えた知的好奇心や社会に対して感じた種々の疑問とそれらの問題を解決するための課題にどのような姿勢で臨むかがより重要となっています。大学教育・研究の理念や使命は時代の変化とともに変わるものと変わらないものがあるはずであると思います。

最後に、長い間お世話になった教職員はじめ関係者の皆様方に心から感謝申し上げます。そして、農学部の益々のご発展を祈念いたします。



農学部での思い出から

末 吉 邦

(応用生命科学プログラム)



今から28年前の1998年3月に、当時大山卓爾先生と大竹憲邦先生がいらした肥料・植物栄養学研究室に教員として加わりました。研究室では、大山先生と大竹先生はダイズの窒素固定やチューリップの栄養生理、私はオオムギの硝酸吸収と同化について研究していました。が、学生の研究指導や圃場管理には教員3名で協力して当たってきました。そのようなこともあって、研究室の学生同士の仲は良く、また私たち教員にも指導教員の区別なく接してくれました。研究室には留学生も比較的多く、タイ、エジプト、トルコなどから来日し、学位取得のための研究を行いました。

私の主とする硝酸吸収と同化に関する研究は分子レベルでの基礎研究で、現場に直結する内容ではありませんでした。その一方で、圃場を使った施肥法に関する共同研究の機会や、新潟県土壌肥料懇話会での現場見学会の機会もあり、農業現場を知ることができま

した。そうした活動を通じて、試験研究や行政の分野でご活躍されている多くの農学部同窓生と知り合えたことは、大変ありがたく思っております。

さて、在職中の大きな出来事の一つとして、建物委員長として関わった農学部校舎の大改修があります。一時移転先の確保、改修後の部屋割り、設備の選定など難題が山積する中、皆様のご理解を得て一つひとつ解決できました。しかし、棟前のヒマラヤ杉の伐採は避けられない判断となりました。改修後は緑の乏しい寂しい校舎周りとなりましたが、2013年の同窓会60周年記念事業で嵐丘庭を立派に再生していただきました。私は2017年4月から2020年1月まで学部長を務めました。その間も同窓会の皆さまには嵐丘庭の草刈り作業を続けていただきました。同窓生、教員、学生が一緒に作業し汗をかき、その後の懇親会で交流するという貴重な機会となりました。2013年に植樹した木々は今では立派に育ち、木陰の道をつくってくれています。嵐丘庭は、本学の中でも最も美しい校庭であると思います。

最後に、これからのさらなる農学部のご発展をお祈り申し上げます。また、多くの良い思い出をくださった農学部と同窓会の皆さまに、心より感謝申し上げます。

支部だより

◆新潟県支部

2025年度新潟県支部長を拝命いたしました松尾（昭63農工卒）と申します。

2020年度の県支部総会以降、新型コロナウイルス感染症の拡大により、総会をはじめとする各種活動の開催を見合わせてまいりました。感染症の収束が見通せない状況ではありましたが、夏季および秋季に実施される農学部嵐丘庭の草刈りには継続して参加し、主に新潟市内在住のOBの皆様と近況を確認し合うなど、交流を続けてまいりました。

また、2023年11月11日に開催された新潟大学農学部同窓会創立70周年記念式典においては、県支部としての開催・運営に参画いたしました。

2024年度に入り、新型コロナウイルス感染症に対する行動制限が本格的に緩和されたことを受け、県支部総会再開に向けた役員会を重ねてまいりました。これまで総会は年度末に開催しておりましたが、新潟の冬期は積雪が多く足元が悪くなることを考慮し、今後は開催時期を夏季へ変更することといたしました。

その結果、2025年8月23日（土）にANAクラウンプラザホテルにて総会を開催し、19名の参加を得ました。

総会ではこれまでの活動報告に加え、2026年度の活動計画および予算案について活発な議論が

交わされました。総会終了後には懇親会を開催し、和やかな雰囲気の中で参加者同士が近況報告や情報交換を行いました。

開催時期の変更により、参加のしやすさにも変化が生じる可能性はありますが、今後も県内OBの皆様にご参加を呼びかけ、交流の機会をさらに広げていきたいと考えております。皆様のご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

松尾勝則（昭63農工）

◆首都圏支部

私たち農学部同窓会首都圏支部は次の日程で総会を開催しましたので、その概要をお知らせします。

日時：令和7年7月5日（土）

13：00～16：30

場所：アートホテル日暮里

ラングウッド（孔雀の間）

来賓：新潟大学農学部同窓会会長

大嶋良夫様（S58、農工卒）

新潟大学首都圏同窓会会長

成田 浩様（S58、経済卒）

記念講演：日本弁理士会副会長

三好内外国特許事務所

高橋俊雄様（S54、農学科卒）

当日は支部会員17名出席し、支部活動及び会計を事務局から報告と質疑を

行い承認されました。

来賓の挨拶は、新たに農学部同窓会長に就任した大嶋会長から、農学部同窓会の新しい活動に向けた話を頂きました。首都

圏同窓会からは今年も成田会長にお越し頂き、各学部が共通して抱えている若手卒業生の参加が少ない課題について、首都圏同窓会で協働して取組むことが必要になってきているのではなどの話を頂きました。

総会終了後には、農学科卒の高橋氏による「弁理士とは」と題する講演を行いました。講演では、アイデアというまだ形のないものに権利という信頼を与えて、社会の発展に繋げていくという弁理士の仕事を伺って、私たち技術者に大変心強い伴走者が居ることを改めて感じました。

懇親会では、昭和50年卒業の村上さんの発声で乾杯し、賑やかな歓談があちこちで見られました。参加者の近況報告後、昭和47年卒業の佐藤さんのリードで「四季の新潟」を合唱し、お開きとなりました。短い時間でしたが、楽しい夏の一時となりました。

支部総会の反省会では、同窓会を活性化するために、若手卒業生の参加を増やしていく即効性のある方法が見つからないため、次善の工夫として、現在の会員がもっと参加しやすくなるよ



うに、来年の開催時期や場所などを考えることになりました。他の支部の取り組み状況などを参考に出来ればと考えています。

柳 雅之（農 昭和58年卒）

◆富山県支部

令和7年の富山県支部においては、令和6年元日に発生した能登半島地震により、県民生活や事業活動が大きな影響を受けました。農地、ため池、水路、農道・林道等にも甚大な被害が生じたため、現在もお復旧・復興に向けた取組みが続けられています。

また、近年の高温傾向により、コシヒカリでは米粒の白濁化が進むなどの影響がみられており、その対策の一環として、高温耐性品種「富富富」の作付け拡大にも取り組んでいます。

このような状況の中、昨年とほぼ同時期である8月29日（金）パレブラン高志会館（富山市千歳町）において、会員43名の参加のもと、令和7年度富山県支部総会および懇親会を開催しました。

総会では、佐藤宏支部長（59卒）のあいさつに続き、令和6年度活動報告および会計報告、令和7年度事業計画ならびに収支予算について審議が行われ、いずれも原案どおり承認されました。

懇親会では、農学部の大橋慎太郎先生をお招きして、大学の近況や農学部の現状等についてご紹介いただく予定でしたが、急きょ都合により欠席となりました。

た。

その後、県議会議員である中川忠昭（47卒）相談役井上学（56卒）相談役からご挨拶をいただいたほか、当日出席された2名の新入会員の紹介が行われ、終始和やかな雰囲気の中で親睦を深めることができました。

今後、より多くの富山県在住会員の皆様に参加いただき、支部活動の一層の充実を図ってまいります。

大田幸夫（63卒）



◆秋田支部

2025年、秋田県の地方新聞読者を選んだ秋田10大ニュースの1位は、クマによる人身被害が相次いだことでした。秋田市でのクマの目撃件数と捕獲件数は過去最多。特に秋以降は市街地や観光地にも頻繁に出没する異常事態となり、繁華街では各足が減るなど経済活動にも影響が生じるほどで、猟友会の負担軽減のため自衛隊に支援を要請する事態に。関連するニュースが、

全国で何度も取り上げられました。天候も異例の年で、4月の秋田市の日照時間は過去最少を記録。雨の日も多く、田起こしや定植作業などの春作業に遅れが生まれました。7月は月平均

気温が過去最高を記録し、降水量は年比の7%と観測史上2番目に少ない記録的小雨となったため、8月にかけて各地で渇水となり出穂期に水がないという騒ぎに。一転して8月下旬から9月には記録的大雨で、河川の決壊や冠水などによる農作物被害が各地で発生するなど記録づくめの1年でした。私は小さな稲作農家ですが、水田の耕起でトラクターが埋まりそうになったり、稲刈り前に田んぼの溝を改めて切るなど、いろいろと気をもんだ年でした。極端な天候が多くなり、年々農業がしづらくなってきた気がします。クマの出没も含めて、今年は平穏になることを願う次第です。

さて、秋田支部の総会は7月12日に秋田駅西口の居酒屋で開催しました。出席者は8名。会の冒頭、長年秋田支部を牽引し7月に逝去された神戸和猛登先生（初代支部長・昭和31年卒・園芸）に黙祷を捧げたあと、6年度の活動報告と会計報告、7年度の事業計画と予算について協議し、それぞれ承認を得ました。4年に1度の役員改選では、副会長に柏谷勝美氏（S58年卒・土壌）、事務局に明珍学氏（H27年卒・草地）を新任しました。懇親会では、幹事の藤晋一先生（H元年卒・植病）から5月に新潟で行われた常任委員会の内容について報告いただいた後、出席者一人ひとりからの近況報告を酒の肴に、楽しいひとときを過ごすことができました。

支部会員の皆様、どうぞお気軽に同窓会にご参加ください。お待ちしております。

ります。

鈴木善彦（平3農）

◆福井県支部

昨年に引き続き、松涛会福井県支部の総会を11月26日（水）夕方から、福井市内のいつもの居酒屋で開催しました。

令和6年度に卒業された高原正陽さんにも新たに会員として入会していただき、現在、福井県支部は総勢61名となっています。今回は、今年から事務局をお願いしている小谷佳史さん（平8年卒、現農業試験場）に取りまとめをお願いし、当日はその内10名の皆さんに参加していただきました。急遽、体調不良で欠席された方もいらつしゃいましたが、当日集まられた皆様は、皆とても元気で、1年ぶりの再開をお互いに喜び合いました。

集合写真撮影の後の総会では、今年亡くなられた高岸実さん（昭46卒畜）のご冥福を祈り黙祷を捧げた後、事務局から会計報告などの説明を行いました。私からは、令和7年5月に新潟市で開催された2025年度常任幹事会の報告をしました。取り分け「令和の米騒動」と言われた今年の状況を踏まえ、各県とも米情勢に関心が高まったことや、「良い品質の米を適正な価格で消費者（実需者）に届けることが大事である」との大島会長の言葉などを伝えました。

引き続き、出席された中で一番年頭の青木源久さん（昭41卒）の乾杯の発声で

懇親会が始まりました。約2時間という短い間でしたが、どつぷりと新潟の思い出に浸るひとときでした。懇親会の終わりに、来年も健康で再会できることを祈念し、小竹哲郎さん（昭51卒）の一本締めでお開きとなりました。

大学を卒業して早や半世紀が経ちましたが、久しぶりに訪れた新潟は当時とすっかりと変わっていました。当時の面影を探して、次の日には新潟駅から万代橋を渡り、榎谷小路（まさやこうじ）を左折し、古町通りを抜けて白山公園へと、かつての景色を思い浮かべながら、ゆつくりと歩きました。

それから越後線に乗って内野駅で降りて、五十嵐の北門から大学構内に入り、当時汗を流したグラウンドや周辺の松林、二セアカシアの白い花を見た後で、生協前広場のベンチに腰掛けながら、かつて自分がここに通っていたことを懐かしみ、そして改めて時の流れを感じました。

会員の皆様も機会があれば、是非青春のひとときを過ごした思い出の新潟を訪れていただき、しばしゆつたりと余韻に浸ってみるのいかがでしょうか。

終わりに

しましたが、事務局をしていただいている同窓会幹事長の大竹憲邦先生には、大変お世話になりましたが、今後ともよろしくお願



いします。

仲谷傳次（昭53卒農）

◆長野県支部

去る令和7年11月23日（日）、秋色深まる松本で長野県支部総会を開催いたしました。昨年に引き続き本部同窓会より大嶋良夫会長をお迎えし、議事はすべて原案通りに承認されました。続く講演会では、「新潟大学農学部及び同窓会の現状」について大嶋会長より分かりやすく説明していただきました。その後の懇親会では、昨年に続き二度目のご臨席となった大嶋会長も、すっかり信州の地に馴染まれ、長野の清酒を嗜みつつ、和気あいあいとした語らいが会場の随所で繰り広げられました。恒例の近況報告が一巡するころには終焉間近、最後に学生歌を歌い一年後の再会を約束してお開きとなりました。

さて、当支部の独自活動として近年注力しているのが「支部通信」の発行です。コロナ禍で対面活動を制限される中、一昨年より発行をはじめ、本年度で第3号となりました。支部幹事会のメンバーが、自らの近況報告や、それぞれの専門知見や経験に基づいた話題を提



供し、本年は5名が執筆しています。

「県の建設事務所勤務時代に携わった村山橋（鉄道路路併用橋）の改修工事秘話」「環境先進国オーストリアと比較した日本の森林管理について」、「秋の味覚であるマツタケはなぜおいしいか」など内容は多岐にわたり、気軽に読める内容で会員からも好評をいただいています。中でも印象野に残ったのは毎日が日曜日（いわゆるサンデー毎日）の解消を目的に、70歳を目前にして一念発起されたKさんの体験記でした。大型二種免許の取得という難関に挑み、見事実技・学科ともに一発合格を果たして観光バスの契約社員として働き始めたそうです。シニア世代であっても、意欲さえあれば未経験の分野にも挑戦できること、そしてそれが生活に心地よい緊張感とメリハリをもたらし、趣味のゴルフにもよい影響を与えているとのこと。次は気象予報士の資格取得にも挑戦されるようです。私自身、未だ現役の身ではありますが、かつて職場でご指導いただいた先輩Kさんの取り組みに接し、自身のリタイア後の生活について大切な教えをいただいた気がします。

伊藤 正

◆北海道支部（R6）

北海道同窓会は、昨年（令和6年）の十月十九日に札幌市において、令和七年度第二五回総会を開催し、令和六年度の活動・会計と令和七年度の計画が承認されました。懇

親会は昭和四五年卒の明田川さんの発声で始まり、新潟の銘酒でほろ酔いながら、皆さんからの近況報告で大いに盛り上がりしました。

私は、農業改良普及員として新潟県で九年、その後地元（北海道）で勤め、今は再任用されています。職場では、作物栽培指導や、これまでの経験を活かし若手への助言などしております。しかし、欠員が年々増加し、肉体的・精神的にゆとりがなくなり、六五歳で完全退職と考えていました。が、「もう少し頑張ってみようか？」との気持ちが芽生えました。

それは、諸先輩方から、新たな職場での取り組みやマラソン大会参加等の活力に満ちた近況を聴けたことによります。今回の参加は、七名とやや少なめでしたが、この盛り上がりがあるから、平成五年卒の傳法寺さんは、稚内から三二〇km、昭和五三年卒の石塚さんは、広尾から二七〇kmかけて参加してくれるのだと思います。

同窓会にこれまで参加された方は、延べ二四二人、毎回、誰か彼かが活力を充電して帰路につきます。

平山敦樹（昭和六一年卒）



日に札幌市において、令和八年度第二六回総会を開催し、令和七年度の活動・会計と令和八年度の計画が承認されました。懇親会は昭和四五年卒の明田川さんの発声で始まり、新潟の銘酒でほろ酔いながら、皆さんからの近況報告で大いに盛り上がりしました。

私は、農業改良普及員として新潟県で九年、その後地元（北海道）で勤め、今は再任用されています。職場では、作物栽培指導や、これまでの経験を活かし若手への助言などしております。しかし、欠員が年々増加し、肉体的・精神的にゆとりがなくなり、六五歳で完全退職と考えていましたが、「もう少し頑張ってみようか？」との気持ちが芽生えました。

それは、諸先輩方から、新たな職場での取り組み等の活力に満ちた近況を聴けたことによります。今回の参加は、七名とやや少なめでしたが、この盛り上がりがあるから、平成五年卒の傳法寺さんは、稚内から三二〇km、昭和五三年卒の石塚さんは、広尾から二七〇kmかけて参加してくれるのだと思います。

同窓会にこれまで参加された方は、延べ二四九人、毎回、誰か彼かが活力を充電して帰路につきます。

平山敦樹（昭和六一年卒）



国際交流委員会の活動

農学部国際交流委員会委員長 吉川 夏樹

農学部同窓会の皆様には、日頃より国際交流活動にご理解を賜り、誠にありがとうございます。今年度は、国際交流委員会として二つの大きな取組を実施いたしました。

一つ目は、米日カウンシル・ジャパン主催、田中産業株式会社のご支援による「TOMODACHI Initiative」への学生参加です。3月には本学農学部の学生7名を含む日本人学生10名がテキサスA&M大学で研修し、8月には同大学から8名を受け入れて農業に関する研修を行いました。

二つ目は、「JST」や「サイエンスプログラム」により、ベトナム・カントー大学から8名（教員1名、学生7名）を招聘し、農学部で研修を実施したことです。いずれのプログラムも、学生にとって多くの学びと交流の機会となりました。ここでは、さくらサイエ

ンスプログラムについて概要を紹介いたします。

カントー大学はメコンデルタ地域を代表する国立大学で、農分野で国際的な評価を受けています。2024年10月には本学と大学間交流協定を締結し、学術交流の深化に向けた協力体制を整えました。本交流では、気候変動に対応した農業技術の体験を通じて、実践的な知識の習得と国際共同研究の基盤強化を目指しました。

さくらサイエンスプログラムで招聘した学生の専門はスマート農業、熱帯農業、作物科学、畜産学など多岐にわたり、本学の関連研究室で実験・実習を行いました。また、「新潟平野スタディーツアー」や食品原材料分野で高いシェアを持つ株式会社タケシヨウ様での研修など、地域農業と産業を学ぶ多様な機会を提供しました。さらに、日曜日に

は「TOMODACHI Initiative」に参加した農学部学生を中心に、古町地区の文化ツアーを企画し、呉服店の見学や人気おにぎり店での試食など、学生同士の交流と地域文化の理解を深める場となりました。

このように、多くの先生方と国際交流に関心のある学生に支えられて本プログラムを実施できましたことに深く感謝申し上げます。今回の経験は、農学部教育の幅を一層豊かにするものと感じております。今後も専門教育の深化と国際性豊かな学生の育成に努めてまいります。



新潟大学前駅での一コマ（新潟農学部の学生が企画した文化ツアーに出発！）

「新潟大学カード」入会のご案内

- 新潟大学全学同窓会では、新潟大学の発展を支援し、同窓会員へのサービスと連携を深める目的で、三菱UFJニコスと連携して「新潟大学カード」を発行しています。

この機に是非ともご入会を！

※詳しくはホームページ
<http://www.niigata-u.ac.jp/dousokai/card/> を
ご覧ください。

入会費
年会費
無料



「食と健康」が新潟大学の拠点研究に！

新潟大学は「食と健康」領域を「脳といのち」と並ぶ全学重点分野に位置付け、大型の競争的資金を獲得し、研究・人材育成・社会共創の三位一体で機能強化を推進しています。

- (1) 研究では、文部科学省「地域中核・特色ある研究大学強化促進事業（J-PEAKS）」に採択され、「未来社会の“脳といのち”と“食と健康”のイノベーションを創出する研究拠点」形成に取り組んでいます。

<https://www.niigata-u.ac.jp/webmagazine/1022409/>

「食と健康」領域は、新潟の豊かな食資源・産業の厚みと、本学の多様な食の研究群を推進する柱です。

- (2) 人材育成では、「未来を先導する世界トップレベル大学院教育拠点創出事業（FLAGs）」に採択され、地域での産学官連携や国際共同研究の場を活用しつつ、研究成果を社会実装へつなぐ博士イノベーター育成体制を構築していきます。

<https://www.niigata-u.ac.jp/news/2025/934422/>

- (3) 社会共創では、内閣府「地方大学・地域産業創生交付金事業」に採択され、食×デジタルによる研究開発・産業創生・若者雇用創出・人材育成・大学改革を実現する「にいがた2 km『おいしさDX』産学官共創プロジェクト」を展開しています。新潟ならではの「おいしさ」のデータ化・可視化を通じ、新たな価値創出に挑戦しています。

<https://www.niigata-u.ac.jp/news/2025/779002/>

- (4) これらの「食と健康」領域の事業推進の中核拠点として、2026年1月に、全学共同教育研究組織「フード&ヘルスイノベーション共創センター（FHI）」を設置し、このたび始動しました。これまでの四半世紀にわたる「地域連携フードサイエンスセンター」の取り組みをさらに発展させていきます。

- (5) さらに今後、コメを対象とした国際的研究センターの設置が予定されており、地球環境課題と農業生産を両立させる研究を通じて、新潟が世界に誇るコメの研究の高度化を目指します。

農学部同窓会の皆さまが築いてこられた地域との信頼関係や、多様な分野で活躍されるネットワークは、「食と健康」拠点形成に欠くことのできない基盤です。

皆さまのお力添えをいただきながら、学生教育・共同研究等のプロジェクトを立ち上げ、グローバルレベルのモデル拠点づくりを新潟地域の皆さまとともに進めてまいります。引き続き、本学の新たな挑戦に変わらぬご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

勝 見 一 生 経営戦略本部 UA室

ペン
レ

同窓生からのたより

野鳥観察から 我が子観察へ

出口 翔大

(平24年生還卒、平29年自然研卒)

の好きな鳥を活かして、地域が盛り上がる教育などの面白い取り組みができないかと模索しています。

②趣味または熱中していること…バードウォッチングが中学生の時から

の趣味でしたが、4歳と1歳の子がおり、最近是我が子のウォッチングがほとんどです。育児休業、部分休業、年次休業などを最大限取得、家族で過ごす時間を大切にし、彼らの日々の成長を日記に綴っています(しかしストレスは溜まるもの。ラニンングと強炭酸水で流し込んでいます)。

③最近感動したこと…子どもの成長と能力です。例えば都道府県のパズル。私たち大人は個々のピースの県名を見て、進めていくのですが、まだ文字が読めない子は、県の形とピースの色、その配置を記憶して日

本列島を完成させていきます。自分には到底できない方法に驚きと感動！(恐らく私たち大人も子どもの頃には持っていた能力なのでしょう、しかし大人は言葉・文字を使うことで、記憶を外付けし、このような能力が鈍化した一方で、記憶の容量を増やしているのかなと、職業柄、科学的に考察してしまったことは蛇足です…笑)。

④同窓生・在校生に対するメッセージ…東京一極集中が進む中、新潟も含めて地域・地方がとても面白いと

感じています。ミロ研究室では「県境でパスポートの提示が必要」といじられていた福井にもぜひ遊びにきてください！

⑤今回の筆者の紹介…大学時代には生産環境科学科森林観光コースの3人でとルームシェアをしていました。今も3人でよくよく会いますが、その一人、中谷智成さんをお願いしたいと思います。私たちの娘は同年年で、LINEのテレビ電話友達です(時代ですね)。



「河渡学舎」の思い出と新潟地震

柳町 邦光

先日、農学部同窓会誌「松涛」42号をお送りいただき、有難うございました。近年の「松涛」を拝読いたしておりますが、ほとんどの内容が、五十嵐浜学舎で学ばれた方々によるものばかりのように見受けられます。私たち「河渡学舎」で学んだ者にとっては、移転後の「五十嵐浜学舎」は全く知らず、とても淋しい想いで読んでおります。我々80才を過ぎた高齢者には、健康体でおられる方々もだんだん少なくなり、あの頃の学園状況・風情を書き残される方も少ないことは当然のことと存じますが、河渡学舎での思い出も踏まえた「松涛」であってほしいと願うのは私だけではないと思われまます。

そこで、私が在籍した1964（昭和39）年には4学年として在学しておりましたが、奇しくもこの年の6月16日午後1時2分には「新潟地震」が発生し、甚大な被害が発生した年でもありました。2024（令和6）年1月1日に能登半島地震が、2011（平成23）年3月11日に東日本大震災が、1995（平成7）年1月17日に阪神淡路大震災が発生し、現時点では防災意識の向上からこれ等の話題も出てきますが、新潟地震に関する話題は遠い過去の災害になってしまっているよう

な感が見受けられます。私の頭中にはあの河渡学舎の風景と共に、甚大な地震災害の状況が鮮明に残っており、この悲惨な歴史をこの同窓会誌「松涛」にも是非に残しておきたいという想いで一杯です。

1. 河渡学舎の風景

構内には赤松とアカシア並木に囲まれた木造の1・2階建の校舎、講堂・図書館や学生食堂の他、学科に特化した専門施設、ちよつと離れた藤見町には農学部専用のグラウンドもある、最も自然溢れた環境の学園でした。6月頃にはアカシアが咲き揃い清楚感が漂う



河渡学舎のシンボル「農学部本館」



連絡用の掲示板



学舎内の中庭



素晴らしい学園風景でした。農学部本部前の広場は、砂利が敷き詰められ、前庭には防火用水池も設置されており、昼間の休憩時間にはキャッチボール等もできたものです。この本館は我が河渡学舎のシンボルでしたし、卒業間際には4学年生一同が集まり、卒業予定者記念撮影会も実施され、記憶に残る思い出になりました。この本館の左側には農学科・林学科系の学舎が、右側には農芸化学科系の学舎がありました。このアカシア並木に囲まれた学舎の一階には、連絡掲示板があり、教務課からの休講等の連絡事項や厚生課からの学内行事等連絡事項の確認のため、先ず立ち寄る場所でもありました。

各学舎の間には、各学科専用の中庭があり、特産のチューリップ等も植えられており、栽培試験場でもあったようです。畜産学教室用の養鶏場もありました。私たち学部生の殆どが、近隣の民家に下宿（間借り）しての生活でした。本部学舎の前には、下宿者用の食堂があり、三度三度の食事はここに通い来て食べたものです。朝食は先ず講義の前にここで食べて、昼休みに昼食、午後の講義の後4・30～6・00に夕食を摂るのが日常のルーティンでした。中には朝食を全く食べない仲間や、用事で夕食を摂らない者もいたりして、毎日の調理数の管理には大変なご苦労があったことでしょう。平日はともかく土曜・日曜の食事時間には下宿から歩いて出向くことが、空腹は何事にも替えられん！の意識が強かったものです。ただ土曜日の夕食だけは調理のおばさんたちのお休みのため欠食でしたので、下宿近くの一般食堂での親子丼等で済ますことが多かったものの、希に仲間と古町まで出向いての食事を楽しめたものです。いずれにしても、私たちの健康管理に大切な食事を提供して下さったこのおばさん達、ほんと

にありがとうございました。ご馳走様でした。

河渡学舎から少々離れた藤見町には、農学部専用のグラウンドがあり、秋には学科対抗の運動会も開催されたものですが、普通はどの程度利用されていたのか不明です。この時代には国立であるが故に十分な敷地が与えられたのでしょうか。今の時代からみれば、随分と裕福な時代だったことが伺えます。

河渡学舎裏には、松林とアカシア等が混じった小高い丘陵地があり、じゅんさい池周辺や物見山へと続く自然豊かな学園風景は、我々の散歩コースでもありましたし、海岸線まで見渡せる素晴らしい自然環境でした。

後述の新潟地震の折りには、この物見山から昭和石油（株）の石油タンク爆発による火災状況が見渡せたものです。

2. 地震の発生

新潟市周辺の地形は信濃川と阿賀野川の扇状地であり殆どが砂丘地でしたので、河渡学舎周辺も砂丘地で赤松とアカシアが茂る雑木林と雑草地も多くあり、典型的な郊外の自然環境でありました。下宿先は新潟市小金町で、新潟市街地から河渡地区へのバス路線沿いにありました。

1964（昭和39）年6月16日午後1時2分、震度5強の地震が発生しましたが、発生時、私たちは農学部本館前の広場でキャッチボールして遊んでいましたが、昼休みも終わり研究室へ戻ろうとしていた矢先のことでした。



地震波による地割れした道路



割れ目に落ち込んだ路線バス



藤見町公衆市場前の地割れ

を炎が左右に「ビューッ」と走り、大きな火柱が「ドオーッ」と昇るのがはつきりと見えました。黒煙の中に赤い炎が見える化学工場独特の火災の様子には異様さと怖さを感じました。この基地には幾つぐらいの備蓄タンクがあったのか？ 小金町は備蓄基地から約2kmぐらいの距離でしたが、次々に爆発する度に昇る炎で「ホーッ」と顔が熱くなるのを感じたもので

地震の大きな揺れに地面に手をついて揺れの収まるのを待っていました。消防用水池（約10m×20m）の水が波打って跳ね上がり、数匹の鯉も飛び出しているほどでした。すぐに研究室に戻ったものの、実験室では試薬瓶が転がり実験サンプルの入ったビーカーや器具類もテーブルから落ちており、消火器具も倒れて泡を吹いている無残な状況でした。手早く周辺を片付けて下宿の状況を確認するため戻りましたが、学舎構内の地表とバス路線周辺の住宅地の地表とは大きな違いが生じていました。河渡学舎の裏には、物見山と呼ばれる松林やアカシア等の雑木林の丘陵地がありましたので、地層の硬いしっかりした土地だったように思われました。一方で住宅地が広がる小金町周辺は砂丘地であり、地震波をもろに受けたため、このような違いが生じたものと考えられます。

3. 地割れの被害状況（小金町の下宿宅周辺）

下宿宅のあった小金町では、道路のアスファルト舗装が煎餅を踏み潰したように地割れて、その段差も1〜2mぐらいで、地震波による地表の「うねり」幅も20〜30mほどの間隔で続き、住宅の傾きなどがはつきりと判る状況でした。

この道路は新潟市内から河渡方面への主要道路であり、新潟交通の河渡行路線バスもこの段差割れ目に阻まれて立往生していました。藤見町にある日本鋼管（株）の工場前の道路は水道管の破裂か？ 近くの河川から流れてきたのか？ 水浸しになっていて、従業員と思われる方々の自宅へ急ぐ様子が見られた。下宿宅もこの地表波に斜めに掛かったため、基礎部分が壊れて、床がフカフカに斜めに歪んでいました。この地震波により傾いた住宅の修理

には、住宅をジャッキで持ち上げ、基礎の改修を行った後に住宅を下した、とのこと。大変な工事だったと思われるが建て替えるより安価にできたのだろうと考えられる。

4. 昭和石油（株）の石油備蓄タンクの爆発・火災

地震発生の直後、「ドーン」という音と共に大きく立ち上る黒い煙と炎柱が住宅の屋根越しに見えたものです。近くで火事が発生したんだなあ、との感覚でしたが、住宅地の被害状況と身の回りの整理等でそれほど気に掛けずにいましたが、度々大きな爆発音が聞こえてくるのと、煙がだんだん大きくなってくることもあり、学舎裏の物見山から爆発の発生場所の確認に行ったところ、海岸線にある石油タンクの備蓄基地での爆発であることが確認できました。タンクが爆発すると、地表



16日のタンク火災（小金町から）



18日のタンク火災（物見山から）

す。夜には家の外の草地にゴザを敷いて寝ていましたが、自動車も通らず、街の明かりも窓の明かりも無く、全くの暗黒の世界であり、あちこちに見える懐中電灯だけが人々の存在を知ることがりのようでした。時折り発生する余震の度に、周囲から「キヤーツ」「ワァーツ」の叫び声には、言いようのない不安と恐ろしさを感じました。3日目ともなると黒煙がどんどんと広がり、晴れていても一日中夕方のような暗さで、遥かに見える遠くの山並み周辺だけが明るい空でした。当時の新潟市消防局には化学消防車が1台もなく、消火作業には爆発防止のため、隣のタンクへの放水しか無かつたらしく、結果的には17日間燃え続けた後にやっと鎮火した、このことを後日の新聞記事で知ったものです。

1964（昭和39）年には東京オリンピックが開催されたため、例年ならば秋期に開催される国体が春期の開催

となり、たまたま新潟県の当番でした。そのメイン会場の新潟市では、信濃川に架かる万代橋の上流側に、新しい八千代橋が架けられる等の交通網も綺麗に整備され、天皇陛下をお迎えしての新潟国体も大成功裏に終えました。その一週間後の地震発生による被害の大きさに、当時の塚田知事が泣きながら記者会見されていたことに心が痛んだものです。天皇陛下が泊まられた新潟駅近くの東映ホテルは1階の半分ほどが地下に沈み込んだ状態で、まさしく天変地異の状況でした。

5. 私の5日間の行動

1日目は、実験室の片づけと下宿宅での安全確認とに終始しました。石油タンクの火災にも気になりながら屋外での避難場所の確保が第一優先事項でした。

2日目には、ラジオや新聞も無くタンク火災の正確な情報もないまま、空

に広がる黒煙を見ながら、下宿宅の子供と一緒にヤカンを持って給水車まで並んだり、近辺の被害状況等をカメラに記録しておこうと、周辺を歩き回ったり、実験室の片づけ等もあって河渡学舎構内へも出向いてみました。構内の松林や教室、廊下等にも、海岸線近くの人々が着のままで避難してきていました。そんな折り「昭石タンクの中に水素タンクがあり、爆発すると半径5kmは危ない」とのデマ情報まで流れてきて、下宿宅の方が松崎にある親戚まで避難するのとなりになり私も一緒に避難しました。まさにフェイクニュースだが、どのようにして流れて来たのか判りませんでした。

3日目には、福井の親に無事である旨の連絡をするため、新潟郵便局の本局まで電報を打ちに出かけましたが、バスは不通だし山の地下区や沼垂近辺は浸水して通れないため、人の流れに従って新潟駅方面から万代橋に向かって歩き続けましたが、どこをどう通ったかはつきり覚えていません。万代橋のたもとにはひび割れがありました。が、通常どおりの自動車の通行往来に安心感が出てきました。しかし、その上流側に出来た新しい八千代橋は、橋桁がバタバタと落ちて無残な姿でした。この八千代橋は、新潟国体の開催に向けて直前に完成した橋でしたが、万代橋の頑丈さと比較され、突貫工事の手抜き工事だと批判されていたようです。ほぼ2時間後によくよく本局に着いたものの、これも長蛇の列で何と

が無事である旨の電報を打って、小金町まで帰ったのが午後4時頃でした。学舎内では避難してきた住民も増えてきて、松林での仮設のテント張りや急ごしらえのドラム缶の風呂等、避難所の最たる風景でした。

4日目には、地割れと水たまり等の不衛生な環境により、赤痢が発生した旨の報道から、ヘリコプターによる消毒剤の散布が行われたが、小金町地区でも屋根瓦が薄っすらと白くなるほどの散布だったのが2階の窓から確認できました。この状況下では「もうここに居るのも限界だ」と判断し、農学部の教務課から「夏季休暇を6月21日に前倒しする」とのこと、また実験室でも電気・水道・ガスが使えず、全く機能不全の状態でもあったことから、夏休みとして福井へ帰ることにしました。5日目には、新潟駅に向かいましたが、駅構内のホーム連絡橋が落ちて列車が入れず、亀田駅寄りに仮設駅が設置されていました。黒煙に覆われた薄暗い新潟に、復興を願いつつ福井へ帰りました。親父からは「16日のテレビの地震ニュースは、新潟からではなく山形県酒田市からの情報ばかりで、お前はどうかだったのか？」と心配していた」とのこと、現在のような映像によるニュース速報のスピード感が無く、地震等の災害情報網の弱さを知らされました。

学部だより

新任教員紹介

生物資源科学プログラム

助教 寺田 拓実



2025年4月に着任しました。寺田拓実（てらだ たくみ）と申します。出身は広島県で、2020年に広島大学大学院生物圏科学研究科で学位を取得した後、日本ハム株式会社中央研究所と広島大学大学院統合生命科学研究科で研究員を勤めていました。専門は動物の免疫学で、博士課程の二ワトリの自然免疫因子（抗菌ペプチド）産生機構に関する研究から始まり、研究員時代にはブタ血清中の中和抗体測定技術に関する研究や、アヒルの高病性トリインフルエンザ耐性機構の解明など、様々な研究課題に従事してきました。やはり従来と異なる研究環境で新規の研究課題に取り組むのは想像以上に大変で、同窓会誌に掲載できない薄暗い感情に囚われていた時期もありました。

一方で、これらの経験から得た“知識”や“技術”は、多角的視野で物事を捉える能力の糧となり、今度の研究活動の土台になっていると考えられています。これらの経験を活かし、日々の研究・教育活動に邁進していきますので、今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。

応用生命科学プログラム（日本酒学センター）

准教授 宮本 託志



2025年4月に新潟大学農学部に着任いたしました。宮本託志と申します。

高校生までは東京都八王子市で過ごしました。幼少期から昆虫が好きです。また、剣道や野球に励んでいました。京都大学農学部に入學し、一時は高校教員を目指しましたが、大学4年生のときに研究の面白さに取り憑かれて大学院に進學しました。ポストドク時代を合わせて15年間、京都大学で過ごしました。

これまで主にイネを対象とした栄養生理と細胞壁形成に関する研究に取り組んできました。特に、イネが環境に応じて土壌から栄養元素を吸収する能力の品種間差とその発現メ

カニズム、イネ科植物に特徴的な細胞壁構造の形成などに興味を持っています。イネは湿潤アジアにおける主要穀物、および草本系バイオマスの供給源として重要です。イネを対象とすることの社会的意義について意識しつつ研究に取り組んでいます。

農学部着任に先立ち、2021年から本学日本酒学センターで酒米の研究に取り組んでいます。日本酒の世界展開が進んでおり、新潟清酒はその一翼を担っています。今後は気候変動に対応した酒米の安定生産と品質向上は勿論、地域ごとの酒造りの多様化にも貢献できるイネの研究を目指します。

何卒よろしく申し上げます。

応用生物科学プログラム

助教 中川 颯也



農学部同窓会の皆様にご挨拶申し上げます。
2025年4月より着任いたします。

ました中川颯也と申します。

私は福岡県の太宰府天満宮の近くで生まれ育ち、その後、宮崎大学農学部に進学し、基礎生物学研究所（総

合研究大学院大学）にて博士号の学位を取得いたしました。

専門は植物科学および遺伝学で、特に朝顔を用いた研究に取り組んでまいりました。朝顔は日本で古くから愛され、多様な珍花・奇葉の系統が残されており、私はそれらの系統を活用して、花の模様や開花時刻を制御する分子機構の解明に取り組んでいます。かつて新潟大学理学部に在籍された和田清俊教授は、アサガオ研究を長年にわたり牽引してこられた研究者の一人であり、私自身、新潟大学に深いご縁を感じております。和田教授の後に続き、アサガオ研究の一層の発展と園芸分野における遺伝育種基盤の構築に寄与できるよう、今後とも精進してまいります。何卒よろしく申し上げます。

農学部の動向

学会賞等受賞

○赤澤隆志

自然科学系（農学系列）第27回奨励賞、日本食品化学学会

○Md. Masud RANA

新潟大学大学院自然科学研究科 博

士後期課程 3年在学中
令和6年度日本地域学会 最優秀発表賞

○湊 菜未

自然科学系（農学系列）

日本植物病理学会学術奨励賞

○Rau Maulana Ibrahim

2024年9月修了

新潟大学大学院自然科学研究科

博士後期課程 国際誌Paddy and

Water Environment, Best Paper

Award

○藤野 まゆ

新潟大学大学院自然科学研究科 博士後期課程

日本土壤肥料学会2025年度新潟大会若手口頭発表優秀賞

○Enes Bakı Ezer

2025年9月修了

新潟大学大学院自然科学研究科

博士前期課程 日本土壤肥料学会

2025年度新潟大会若手ポスター発表優秀賞

学位取得

○高野 陽平（2015年3月卒業

2025年9月修了）生産環境科学

科 新潟大学大学院自然科学研究科

博士（農学）、新潟大学

○今井 康貴（2012年3月卒業

2024年4月修了）理学部生物学
科 新潟大学大学院自然科学研究科

博士（農学）、新潟大学

○鈴木 洋（1965年3月卒業）

農学科

博士（農学）（2018年）、岩手大

学

学会等の開催

○日本土壤肥料学会（2025年9

月16日～19日）、日本土壤肥料学会

2025年度新潟大会、新潟大学、

大会委員長 大竹憲邦教授、農学科

応用生命科学プログラム

○日本作物学会（2025年9月21

日～22日）、日本作物学会第260

回講演会およびシンポジウム、新潟

大学、運営委員長 山崎将紀教授、

農学科生物資源科学プログラム

○日本農作業学会（2025年3月

26日（水）～28日（金）、2025

年春季大会（第61回通常総会・第60

回講演会）、新潟大学、大会委員長

長谷川英夫教授、農学科流域環境学

プログラム

○北陸線植物バイオサイエンス研究

会（2025年12月14日）、第8回北

陸線植物バイオサイエンス研究会、

新潟大学、実行委員長 湊菜未准教

授、農学科生物資源科学プログラム

会 員 計 報

佐藤 陽二（S23年3農専）

藤原 晴和（S23年3農専）

和田 正雄（S23年3農専）

渡辺 幸光（S26年3農専）

水無瀬重彦（S31年3林学）

楠 清昭（S36年3農学）

罇 弘（S36年3農学）

田中 昇（S38年3林学）

山崎 晴雄（S39年3農化）

永木 英雄（S39年3農化）

久保田忠之（S41年3農学）

市江 和人（S58年3農工）

梁取 昭三（旧職員）

卒業生の皆様へ

松濤42号におきまして、北海道支

部の活動報告に関する記事の掲載に

漏れがございました。また、ペシリ

レーにご寄稿頂いた半澤拓夢様の所

属に誤りがありました。生産環境科

学科と記載しておりましたが、正し

くは応用生物科学科でした。関係者

の皆様並びに読者の皆様にご迷惑を

おかけしましたことを、謹んでお詫

び申し上げます。今後はこのような

ことのないよう、編集部一同、再発

防止に努めてまいります。

事務局研幹事長 大竹憲邦

急 募

農学部同窓会事務局

ボランティアスタッフ募集

現在、農学部同窓会では事務局員が不在のため、大竹が事務局業務を兼務しております。しかしながら、教授としての業務が多忙であり、同窓会事務局業務に十分に対応できていない状況です。つきましては、同窓会事務局の運営をお手伝いいただけるボランティアスタッフを募集いたします。

■募集対象

五十嵐キャンパス周辺にお住まいの方で、大学事務職員をご退職された方（または同等の事務経験をお持ちの方）

■主な業務内容

・パソコンを用いた事務作業・総会運営補助・草刈り等の行事対応・「松濤」編集作業・本部との連絡業務・卒業生・新入生への資料発送・名簿管理および基金の出納補助

■勤務条件

週2～3日、1日4時間程度（応相談）※ボランティアではあります。若干の謝礼をお支払いします。

なお、名簿管理や基金の出納業務を伴うため、事前に面接を実施させていただきます。

同窓会運営を支えていただける方のご応募を、心よりお待ちしております。

応募はメールでお願いします。
幹事長 大竹憲邦
ohtake@agr.niigata-u.ac.jp

職場紹介

株式会社 エコリス

代表取締役 藤岡健司 (平成9生環・平成11自然研)

《会社概要》

株式会社エコリスは、動物・植物・生態系を対象とした自然環境調査を専門とする会社で、宮城県仙台市に拠点を構えています。東日本大震災後には、ミズアオイが咲き、カエルの大合唱が響く仙台市郊外へと移転し、緑に囲まれた環境のなかで調査研究に日々取り組んでまいりました。かつては仙台駅から徒歩5分という都心に事務所を構えておりましたが、現在の自然豊かな環境は、さまざまな生物の気配を感じながら働く私たちにとって、よりいっそう自然との距離を縮めてくれる場ともなっています。

場から現場へ移動し、若手社員だと年間、150日程度、多い人だと200日ほど出張し、地域地域の生物相の把握に努めています。我々の生活は自然の恵みなしには存続しえませんが、人と自然の橋渡しになるべく、1995年9月に設立し、お陰様で今年、30周年を迎えることができました。

《業務概要》

主力業務は、環境アセスメントに関する生物調査です。かつては道路・ダム・廃棄物処理施設などの整備事業に伴う調査が中心でしたが、東日本大震災以降、風況に恵まれ温泉資源も豊富な東北地方では、風力発電や地熱発電に代表される再生可能エネルギー関連の調査が増えました。さらに近年は、グリーンインフラやネイチャーポジティブを軸とした新たな取り組みも増えており、加えてアーバンベア問題やシカの増加に伴う人獣共存の課題へ対応するため、鳥獣管理分野の仕事に

も注力しています。具体例として、ツキノワグマの個体数推定を目的としたヘアトラップ調査（採取した毛のDNA分析による個体識別）や、バイズ推定を用いたニホンジカの個体数推定など、科学的な手法を積極的に取り入れています。

調査技術は進化を続けており、従来の「足で稼ぐ」手法に加え、環境DNA解析やコウモリ音声解析、機械学習を用いた画像解析、ドローンによる空撮調査など、新しい技術にも柔軟に対応しています。これらは、生物の実態をより正確に捉えるための大きな力となっています。

《新潟大学農学部出身者について》

新潟大学農学部出身者については、これまでに私を含め3名が在籍し、現在は2名が勤務しています。いずれも旧生産環境科学科（現在は流域管理学科プログラム？）出身で、学生時代にはタヌキ、タガメ、トキなどを対象に研究を行ってきました。大学で培った動物生態学・保全生物学の知識や野外調査の技能は、現場での調査はもちろん、取得データの解析にも大いに生かされています。統計解析ソフトRやGISを駆使して生息適地のモデリングや個体数推定を行うなど、科学的根拠に基づいた生物保全のための提案にも日々取り組んでいます。

株式会社エコリスは、社是である「楽しく」のもと、「自然の中に身を置き

たときの心地よさ」と「生きもののへの探求心から生まれる感動」を大切にしながら、豊かな自然環境の継承と、より良い社会環境づくりに貢献できる企業であり続けたいと考えております。



巣箱調査で確認された
天然記念物のヤマネ

2025年に
創立30年を
迎えました



非公認キャラクター
エコリスちゃん (Ecoris ecoris)